

万延元年遣米使節団が出合ったミュージアム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学学芸員養成課程 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 駒見, 和夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20555

万延元年遣米使節団が出合ったミュージアム

駒見 和夫*

はじめに

近代のヨーロッパで成立したミュージアムの文化。これをはじめて観覧した日本の政権関係者は、江戸幕府が派遣した万延元(1860)年の遣米使節団で、続いて文久元(1862)年に出発した遣欧使節団であった。一行がどのようなミュージアムに足を踏み入れ、如何に理解したかを検証することは、後の博物館の創設動向とその理念形成の背景に迫るものと考えられる。両使節団のミュージアム見聞に関しては、団員の日記をもとにした椎名仙卓(椎名 1986・1988・2005)と後藤純郎(後藤 1990)の研究、また、アメリカ側の記録検証も加えた財部香枝(財部 1999)の論考がある。それらを土台に、本稿では開国後最初の万延元年遣米使節団が出合ったミュージアムについて考察する。一行が残した記録の読解からミュージアムに対する認識を把握し、やがて構築されるわが国の博物館観とのかかわりを考えたい。

1. 遣米使節団とミュージアムの記録

遣米使節団は、安政5(1858)年に締結調印された日米修好通商条約の規定により、ワシントンで条約批准書の交換が取り決められたことから幕府が派遣した。正使の新見豊前守正興、副使の村垣淡路守範正、監察の小栗豊後守忠順のもとで総勢77人。万延元(1860)年1月18日に品川沖で乗船し、9月28日に同所に帰着した。行程は、ハワイ経由で3月9日にサンフランシスコへ到着。3月18日に

出帆し、パナマを経て閏3月25日にワシントンに到着し4月20日まで滞在。その後フィラデルフィアで8日間を過ごして4月28日にニューヨークに至る。5月12日帰途に就き、ジャワと香港に寄港後帰国した。

一行はアメリカの軍艦で渡航したが、幕府は使節警護と遠洋航海の実地訓練の名目で咸臨丸を随行させ、その乗組員に福沢諭吉がいた。福沢はやがて『西洋事情』を著して博物館の理解と普及に大きな貢献をなすが、咸臨丸の乗員はサンフランシスコまでの往復行程で、その先は使節団に同行していない。

使節団の目的は条約批准書の交換であったが、アメリカの国情探索も各人の意図にあったことはそれぞれの日記から窺える。アメリカ側でも日本の自発的な開国と交易の促進のため、一行に世界の実情を認識させる目的もあった。佐藤恒蔵の『米行日記』には大統領に合衆国全州の遊覧を勧められたとある¹⁾。使節団は滞在先で様々な施設を訪ねており、熱心に見聞に努めたことがわかる。ただし、使節一行、とくに下級者の行動は三使の下で厳しく制限され、単独外出なども禁じられていた。正使従者の玉虫左太夫は『航米日録』にその不満を吐露している²⁾。

団員がミュージアムと最初に出合ったのはワシントンである。“Patent Office”(パテント・オフィス、と以下記す)と“Smithsonian Institution”(スミソニアン、と以下記す)を訪れており、さらにこれまでほとんど検討されていないが、ニューヨークで“Barnum’s

* 明治大学文学部 教授

American Museum”（バーナムのアメリカンミュージアム、と以下記す）にも足を運ん

でいる。3つのミュージアムを記した団員の記録の一覧を表に示した。

表 ミュージアムを記載した団員記録とそれぞれの捉え方

団員（年齢・役務）と記録	パテント・オフィス	スミソニアン	バーナム・アメリカンミュージアム
村垣淡路守範正（48歳） 副使、『航海日記』 ³⁾	4月2日 百物館	4月14日 奇品・究理の館	—
玉虫左太夫誼茂（37歳） 新見従臣・仙台藩士 『航米日録』 ⁴⁾	4月2日 博物所	4月7日 (収納品列記)	(5月8日)? 禽獣の観場
柳川兼三郎當清（25歳） 新見従臣、『航海日記』 ⁵⁾	4月2日 医学館の類	4月7日 医学館の類	(5月6日)? 見世物小屋
野々村市之進忠實（43歳） 村垣従臣、『航海日録』 ⁶⁾	4月2日 画像・諸国珍物・ 発明品収集所	4月7日 諸国珍物の収集所	5月9日 奇獣異鳥の見世物
福嶋恵三郎義言（19歳） 小栗従臣 『花旗航海日誌』 ⁷⁾	4月2日 名器宝物収蔵所	4月7日 (収納品列記)	—
木村鉄太敬直（31歳） 小栗従臣・熊本藩士 『航米記』 ⁸⁾	—	4月7日 万国奇物収集の寺院	5月9日 <small>ミゼキョノ</small> 祭観場
森田岡太郎清行（49歳） 勘定組頭、『亜行日記』 ⁹⁾	4月2日 器械局	4月17日 百貨貯蔵、究理道具の所	—
日高圭三郎爲善（24歳） 徒目付、『米行日誌』 ¹⁰⁾	4月2日 諸国物品館	—	—
名村吾八郎元度（34歳） 普請役格通弁 『亜行日記』 ¹¹⁾	4月2日 ¹²⁾ 博物館	4月14日 電気機具等のある役所	—
村山伯元淳（32歳） 御番外科 『奉使日録』 ¹³⁾	4月2日 諸国産物・諸国器械類・ 模型収集所	4月12日 諸国物産の収集所	—
加藤素毛〔雅英〕（32歳） 外国方御用達伊勢屋手代 『二夜語』 ¹⁴⁾	4月3日 ¹⁵⁾ 宝蔵	4月7日 (収納品列記)	(5月5日)? 奇獣を見る
佐藤恒藏秀長（37歳） 外国方御用達伊勢屋手代 杵築藩士、『米行日記』 ¹⁶⁾	4月9日 宝蔵	4月7日 世界中の種々珍物の蔵	5月9日 諸国珍物を集め人に 見せる、医学館を想像
佐野貞輔鼎（30歳） 益頭従臣・加賀藩士 『萬延元年訪米日記』 ¹⁷⁾	*日付不記載 宝蔵似	4月2日 ¹⁸⁾ 宝蔵類 民衆に示し識見を広める	5月9日 猛獣の見世物等

2. パテント・オフィス

最初に観覧したミュージアムはパテント・オフィスで、12人が綴っている。多くが記した4月2日は条約批准書交換の前日、名村の日記に「御目付役々_#従者迄」とあり、三使に大勢が同行した公式訪問とみられる。4月9日の佐藤は、「見物を請ふ士官誘ふて」の観覧である。7日から市中の遊歩買物が自由となっており（野々村、記）、周囲の勧めもあったと考えられる。パテント・オフィスは特許局であり、ワシントンのノースウエスト地区にあった。現在はスミソニアンのナショナル・ポートレート・ギャラリーとアメリカ美術館になっている。海軍のチャールズ・ウィルクス（Charles Wilkes）の探検隊がアメリカ西海岸や南洋地域で収集した自然誌、地質、民族のコレクションを一時収納し、1858年のスミソニアンの国立博物館開設に伴い移された。それでも使節団が訪れた時には、自然誌や器・機械を中心とした物品を収納陳列していた。一行の記録から子細が読みとれる。

パテント・オフィスの性格や内容の認識が窺える記述を抽出すると、玉虫は「博物所」、名村吾八郎は「博物館」、柳川兼三郎は「醫學館の類」、森田岡太郎は「器械局」、福嶋恵三郎は「名器宝物收藏ノ所」、加藤素毛と佐藤と佐野貞輔は「宝蔵（寶藏）」、村垣は「博物館」、日高圭三郎は「諸国物品館」としている。

“博物”の語を充てた玉虫は、禽獸魚虫の標本や各国の諸道具、衣服、器械模型など多種の物品の存在を示したとみられる。「一品ノ器械ヲ尋ヌレバ衆品見ル能ハズ、衆品ヲ見レバ何器タルヲ問フ能ハズ、唯茫然目ヲ驚スノミ」とも記し、種類と数の多さに感心している。名村も同様で、生物や植物の標本をはじめ、人骨、発明品の武器・銃砲類、蒸気機関製造の諸模型、日本の道具など、多種にわたる陳列品を列記しており、その内容を“博

物”と認識したと考えられる。

名村と玉虫が表記した“博物”の語は『博物新編』を念頭に用いた可能性が大きい。『博物新編』は医療宣教師のベンジャミン・ボブソン（Benjamin Hobson）が中国語で著したもので、物理学、化学、天文学、動物学の最新知識を解説した自然科学書である。1855年に中国広州で発刊され、間もなく日本に持ち込まれ、幕府蕃書調所による官板の和刻本も安政6（1859）年もしくは翌年の万延元年には刊行されている（八耳 1996 pp.133-134）。この時期の藩校や郷校の教科書としても使われており、文久遣欧使節団の市川清流の『尾蠅欧行漫録』¹⁹⁾にも引用がみられる。西洋の自然科学を理解するための必読の書として、中国語版もしくは翻刻版に団員が親しんでいたことは想像に難くない。ことに名村は和蘭通詞を代々担う家柄の出である。なお、明治5（1872）年9月の小学教則では、「理学輪講」と「博物」の教科用書に『博物新編和解』が指定され、普及した書籍であった。また、アメリカ人宣教師ダニエル・マッゴワン（Daniel Macgowan）が1951年に中国寧波で出版した中国語科学技術書の『博物通書』も、安政元（1854）年以降には日本で写本や翻刻本が刊行され、使節団の佐野は「テレグラフ 電気通標と記すものなり」と日記に書き、「電気通標」は『博物通書』系の用語であることから（八耳 1992 pp.124-127）、同書から知識を得ていたのがわかる。

『博物新編』や『博物通書』を著した宣教師たちは“natural philosophy”および“science”の訳語に“博物”を充てており、この時代の“natural philosophy”は動・植・鉱物や天体などの自然物理解、“science”は工業技術の意味合いが強い。つまり、パテント・オフィスの自然物や工・産業技術を集めて陳列した様子を、玉虫と名村は“博物”の概念に結びつけたと考えられる。

一方、「医学館」に類するとして柳川の記述には、「婦人懐妊してより十月の間 壺と月毎に腹をさきて膚わけをしたる有 硝子の箱に入置ノ之」とある。これに加え、「各國の衣類鳥獸草木器械道具 其外寄工の品踏草り農業の道具類にいたるまで皆此處にあつめ又家作のひなかたの類も有」と状況を記している。医学館は寛政年間に整備された幕府直轄の医学館で、諸藩でも設けるところがあり、ここでは薬品会も定期的に開催されていた。人体や動植物、さらに鉱物の標本を教材として具備しており、また薬品会には草木や金石、鳥獸、魚虫介類などが説明を付して陳列され、知識に資することを意図したものであった。こうした医学館における教材や薬品会での各種の標本陳列と重ね合わせたとみられる。

“器械局”とした森田は、陳列物品として真っ先に「珍奇之器械」を挙げており、この認識が強かったことの表記であろう。

そして福嶋は、「万国ノ珍物器産」の“名器宝物”があることからその収蔵所と表し、加藤は「新規発明の器械」や「世界中にある処の艸木・禽獸・奇石等」の物品から“宝蔵”としたようである。同じく“宝蔵”と記す佐藤は物品を国王の所有と理解し、佐野も「寶蔵に似たる」としているが、「諸装置の雛形を夥しく収蔵す。此の器は何某の發明なりとのことを詳記す。發明者の功を永く傳ふる爲と見えたり」と雛形収蔵の目的を捉え、さらに機械類の収蔵の意義を次のように判じている。

其の品物は船車、蒸氣装置の諸器械、機杼の器械、或は蒸氣力を用ひ、又は水力に依りて綿を紡ぎ糸を出し、一時に數百人の勞を省く許多の織機等なり。これらを速製して諸國に鬻ぐが故に、物産十分にして、自國に生産する物價これに依りて高直に及ぶことなし。又軍事の機械・大砲及び車臺等の雛形並びに小銃も甚だ多し。悉く注目し得がたし。此の所に又橋梁の雛形夥しくあ

り。或は木を以てし、又は鑄鐵を以てし、或は大水に會して容易に流失せざるやうに工夫を廻らしたるものあり。

つまり、佐野が“宝蔵”と捉えた収納物は、珍品器物というだけでなく、有益な知識を包蔵する意も含めていたのである。

“百物”と表した村垣は、「蒸氣機關はじめ、種々奇巧の機關の雛形數百種有。器物の農工、凡日用各國の種類、我國の農具、其他の品も有り。先年ミニストル＝ハルリスに賜りし時服は其儘掛て有。各國の條約書までも納たり」と物品の多種多様さに目を見張り、それを示したものとみられる。“諸国物品”とした日高も同じで、他国の物品まで収集されていることを受けとめた表記である。また、村山伯元は「諸国産物并諸国工夫之器械類雛形ヲ聚ムル処」と記し“百物”や“諸国物品”と似た理解で、野々村市之進は「彼国ニテ發明シタル品ハ、大ナルモノハ雛形、小ナルモノハ其品一品宛、此処へ差出スモノト承ル」とあり、特許局の機能を観察している。

このような表記からパテント・オフィスに対して捉えられる認識は、第1が諸国の産物や動植物標本など多種多様な物品の収納施設とする理解で、記録者すべての基本認識となっている。各物品や収納の状況をよく観察したものが多く、ここから踏み込んで、第2は“博物”の所・館や“医学館”に類するとみて、学識に資する意図を汲んだ認識である。そして第3は“宝蔵”のように物品の珍しさや希少さを宝物とみる捉え方であるが、佐野はそこに学びの利をみとめている。

3. スミソニアン

スミソニアンの観覧は4月7・12・14・17日の記録がある。14日は「使節_衆役々」(名村、記)の訪問で、「局の長官出て案内し」(村垣、記)とあり、初代長官のジョセフ・ヘンリー(Joseph Henry)の応対とみられる。7日は先述のように市中遊歩が許可された初日で、

大勢が真っ先にここへ足を運んでいる。三使の訪問はアメリカ政府の招待によるものであった(財部 1999 pp.64-66)。

スミソニアンは1846年に設立決定した機関で、1858年に“U.S.National Museum”(国立博物館、と以下記す)をワシントンのモール地区に開設している。使節団が訪問したのは開館間もない国立博物館で、木村が『航米記』に描写した建物図が当時の国立博物館の姿と一致する。ここは自然誌、人類学、技術を対象としており、展示室のほかには講堂、図書室、画廊、物理・化学の実験室、総裁・家族の居室などがあった(高橋 2008 p.300)。団員の記録はその様子をよく示している。

スミソニアンの性格や内容の認識が表れた記述を抽出すると、大多数は諸国の珍物や物産の収納場所と捉えるものである。野々村は「諸国ノ珍物ヲ集メタル処」、木村鉄太は「万国ノ奇物ヲ収タル寺院」、森田は「珍禽虫奇獣珍貝魚類等其外 百貨貯蔵ノ所」、村山は「諸国物産ヲ聚タル」と記し、加藤と佐藤も同様に表記している。木村の“寺院”という見方は、ほかにも柳川と福嶋が「寺院よふなる所」「寺院ニ似タリ」と記している。国立博物館の講堂を柳川は「本堂の類にて説法等之席」、福嶋は「法談所ノ如クアリ」とみており、さらにキャッスルと呼ばれた国立博物館の塔のある形容もあって、寺院のようにみたのであろう。また、柳川は各国の衣・道具類や山海の鳥獣、貝類などの内容について、パテント・オフィスと同じく「醫學館の類」としている。自然誌をはじめとする標本陳列の場に「医学館」と近い機能を見出したと考えられる。

一方、村垣は「奇品はた究理の館」と表記し、「エレキテルの器械種々有。窓をとじてくらくし、稲妻を席上に發し、さまざまの奇術を成して見せけり。またこなたの席には椅子あまた有て、究理の學問所とみゆ」と体験を綴り、実験研究の役割に着目している。森田

も「堂内窮理道具沢山仕懸ケアル所」と実験室に目を向けており、名村はスミソニアン自体を「電気機具等ヲ備置アル役所」との理解である。パテント・オフィスを“博物館”と表した名村であるが、スミソニアンでは自然誌や人類学に関する記述はなく、実験室と画廊だけの見聞だったのかもしれない。同じくパテント・オフィスに“博物”を用いた玉虫も、スミソニアンを「数十ノ高架ヲ設ケ、珍禽・奇獣并万国ノ什器ヲ列ス」とみているが、ここに“博物”の語を充ててはいない。やはり、実験研究の機能を強く認識したことが考えられる。

佐野は「天下萬國の奇珍異物ここに集簇す」という状況から、パテント・オフィスと同様に「寶藏の類」の理解である。「按ずるに、諸物を多く集めて衆民に示し、人の識見を廣からしむものならんか。詳かに其の目を學ぶるに暇あらず」と綴り、パテント・オフィスでもそうであったが、人びとの識見を広める施設と捉えている。また、佐藤は「國人他州に至り珍物を得る毎に此所に納むといふ」と記し、収集のあり方への関心がみとめられる。

ところで、村垣はスミソニアンの陳列内容に批判的な目を向けている。歴代大統領の毛髪を額堂に掲示しているのを「禮なき事此一事もて知るべし」と非礼と断じ、鳥獣剥製や生物の液浸標本には「見も心地あしき事也」と嫌悪感を記している。さらに、ガラスケース内のミイラにおいては、「天地間の萬物を究理する故、斯の如きに至るといへど、鳥獣蟲魚とひとしく人骸を并て置は言語に絶たり。額に汗するといふ古語に反復せり。則夷狄の名はのがれぬ成るべし」と述べ、研究のためであっても卑しむべきことと激しく非難しているのである。陳列行為に対する当時の日本人の価値観としてしばしば注目される記述であり、とくに後者の意識は、「人間の死骸を鳥獣虫魚と一緒に展示しておくのは、仏教徒である日本人にとっては耐え難いことで

あったのであろう」(椎名 2005 p.31)と椎名仙卓は指摘し、宗教観の違いをみている。また、西欧的思想への違和感と批判が内在すると読み解く松宮秀治は、「西欧文化を徹底的に異文化として捉え、直感的に違和感を感じとる、すなおな感受性が生き生きと作用している。(中略)科学という大義名分で死体を平然と衆人の視線にさらす西洋人は、“人倫”という犯すべからざる道德律を無視することに罪悪感をもたないゆえに、まさに“夷狄”の名をのがれることのできない人種であるというのが村垣の考え」(松宮 2003 p.12)だとする。

村垣のような批判を強くもった見方は、他の団員にはほとんどみられない。文化や習慣への戸惑いを記してはいるが、多くは客観的に観察して受け止めている。スミソニアンやパテント・オフィスについてもそうである。副使の村垣は48歳で、正使の新見より8歳、監察の小栗より12歳の年上で、三使をけん引する自覚が強かった。遣米の拝命に際して「天地開闢以來初て異域の使命を蒙り、君命をはつかしむれば、神州の恥辱と成らんことゝおもへば、むねくるしき事がぎりなし」(9月13日、記)とあり、勇んだ覚悟がみられる。その気負からか、国務長官との面会では「外國の使節に初て對面せしに、いさゝかの禮もなく、平常懇志の人の來りし如く、茶さへ出さず濟ぬるは、實に胡國の名はのがれがたき者とおもはる」(閏3月27日、記)と立腹し、ほかにも高官の格式張らない対応などに批判や憤りを記している。大統領との公式謁見後に詠んだ歌は「ゑみしらも あふぎてぞ見よ 東なる 我日本の 國の光を」(閏3月28日、記)で、日記の執筆動機の一文には「たゞ海外に航して、神國のたふとき事をしり」(巻末、記)ともあり、自国を尊ぶ意識が強い。村垣の見方は、西洋を野蛮と見下したものと指摘もある(マサオミヨシ 1984 pp.87-136)。また、村垣が『航

海日記』をまとめたのは文久元(1861)年4月から7月15日の間で、函館奉行に就き、ロシア軍艦対馬占領事件の困難を極めた対外折衝に当たっていた。こうした反動から、異国の文化や風習を蔑む見様が随所に表出したと推察される。

したがって、スミソニアン陳列資料に対する村垣の捉え方はその立場による偏向的な側面が強く、当時の日本人の一般的な考えにはあたらないとみるのが妥当である。

4. パーナムのアメリカンミュージアム

ニューヨークへ4月28日に到着した一行は、5月1日に三使が市庁を訪問し、翌日から団員が市中に出かけている。パーナムのアメリカンミュージアムを見物したことは、野々村、木村、佐藤、佐野の記録に明確である。4人が訪れたのは5月9日で、だれも名称を把握できなかったようで記載がない。案内された訪問は施設名を記しているので、ここは彼らの意思で立ち入ったとみられる。佐藤の記述が以下のように詳しい。

一大家あり 前に種々の看板を出す 是則諸國の珍物を集め人を待て之を見せしむるを以業となせしむるもの也 往て是を見るに珍器或は人物又鳥獸魚貝の類に至る迄無量集めて遊觀に備ふ 其一二を擧れハ奇童あり 甫めて七歳にして身の丈五尺肩幅二尺五寸顔及手足皆準して肥大なり 然れとも顔色は實に幼けなく最其歳に應ず 其母傍にあるを見るに尋常の人に異なる事なし 又夫妻一男兒あり 共に總て髮毛長く潔白也 又一男子あり 身の丈三尺に及ハす 顔黒色恰も墨を塗るか如くにして猿に似たり 音聲頭上より出るかことし 米人は是を呼てハルフ、モンケンと云 半は猿と云義也 爰に又諸國の人物の肖像あり 其中有名の佛蘭西國の帝ナポレヲンボナハル肖像を見るに丈け高く肥満せり 顔丸く赤色勇美なる男

なり 傍に南亞墨利加の人物あり 丈壹
丈に及ぶ 又傍に三尺位男あり 何れの
人と云を知らず 獅子虎豹其他異獸奇禽
枚擧し難く我國醫學館を想像せり

バーナムのアメリカンミュージアムはブルックリンに所在し、フィニアス・バーナム(Phineas Barnum)が“Scudder’s American Museum”を1841年に買い取って開設した。著名人の肖像画や蟬人形の陳列もあったが、珍獣や人魚とする剥製のほか、フリークスを小人や巨人などと偽装し、ショースタイルで披露したミュージアムとして知られる。建物の周りに多数の旗を並べ立て、窓の間の壁には動物の絵を飾っていた。佐藤の記述はこの状況と合致する。

人びとが楽しみ遊ぶ興行的な場と捉えた佐藤と同様に、野々村は「奇獸異鳥ノ見セモノ」としている。佐野も「猛獸の見世物等」と表記し、「前年までは亜細亞洲のシヤム國に産したる連體子も此の處にありて、見世物にしたる由なり」とも記して、フリークスが見世物扱いになっていることへの着目がみられる。当時、日本の見世物は江戸を中心に盛んで、籠・貝・瀬戸物・硝子・生人形・からくりなどの細工物が多く、ほかに曲芸や演芸、舶来の鳥獸、さらに数は少ないが、熊女・蛇女・鬼娘・大女などの人間の出し物もあった(川添 2000)。火除地や寺社境内に期間を限った小屋を設け、口上で人を惹き寄せるものであった。江戸後期には銭を払って見物するのが都市庶民の楽しみに根づいていたようで、その内容とスタイルは団員が観たバーナムのミュージアムと共通の部分が多い。

ただし、佐藤はここを興行的な場としながらも、「獸奇禽枚擧し難く」という様子を「醫學館」と重ね合わせている。教示的な意図があることも看取したからと考えられる。また、木村はここを「聚觀場」と書き「ミセモノ」と付記している。「珍禽奇獸ヲ以テ。人ヲ聚ソ。錢ヲ催ス者」と説明し、それは木村の知る見

世物の様子であるが、異なる気配も感じ取って「聚觀場」と表記したと考えられる。アフリカ象の剥製があり、「始ハ戯ヲ為シ。能ク人ニ狎ル。後ニ侈ヲ生ジ。人ノ命ニ從ワズ。終ニ鳥銃ヲ以テ。之ヲ殺ントス。彈丸。貫テ能ワズ。之ヲ野ニ誘キ。六斤彈ヲ放テ。殺ト云」と、解説から得たとみられる知識を記している。教示的な陳列品のあり方に見世物との違いを捉えたのであろう。

バーナムが目指したミュージアムは、だれもが安価に楽しめ、かつ高い教育効果を有するポピュラー・エンターテインメントの殿堂であり、家族連れが手弁当をもって詰めかけていた(富島 1993 p.28)。卑俗性も有し、娯楽に重心を置きながらも教化と両立をねらったバーナムのミュージアムは、しばしば指摘されるように、アメリカの後のミュージアムが備えるべき役割や方向性を左右する存在であった。野々村と佐野は人びとの娯楽に供する見世物と認識したが、他方で佐藤と木村は教化的な意図も感受していた。

4人のほかにも、加藤は5月5日に「虎像(象周)其外奇獸を一見として、かひるく到る」と書いており、象を売りにしていたバーナムのミュージアムの可能性がある。柳川は6日に「見世物小屋に立入見物す 數十の熊有 何れも牛より大なり 人と角力をとり或ハ木に登 其外虎黄鳩等を見る」と記し、玉虫は8日に「禽獸ノ觀場アリ、珍禽・奇獸名ヲ知らズ、或ハ鍊鎖ヲ以テ罩ス、或ハ鍊闌中ニ入ル。獅子・虎ハ活物ニ非ズ、毛皮ヲ以テ其形ヲ象ドル」とある。ニューヨークでは“Central Park Zoo”の前身のメナジェリー施設が1860年代にできており(若生 1990)、柳川と玉虫と森田の記事はこの可能性も考えられる。しかし、熊と人の格闘や動物剥製からするとバーナムのミュージアムの様相に近い。“New York Museum of Anatomy”など、ニューヨークには興行的なミュージアムが他にもあったようだが、団員が訪ねた場所かは

定かでない。

5. ミュージアムのインパクト

アメリカのミュージアムは1770年代に創設され、既存のコレクションを引き継ぐのではなく、当初から国民の教育を目的に創られた点がヨーロッパと異なり、これがミュージアムの理念と運営の基盤となっている。とくに、チャールズ・ピール（Charles Peale）が1786年に“American Museum”をフィラデルフィアに開設して以降、教育的役割の実現を目指して様々な手段が試みられてきた。ピールは多種の自然誌資料と肖像画、さらに諸民族の武器や生活道具類、骨格標本などを収集展示し、教育を重視しながら市民の楽しい体験となるように教化と娯楽の両立に注力した（高橋 2008 pp.111-117）。ピールの資料の一部はパテント・オフィスに一時期引き継がれる。また、この流れのもとで知識の増大と普及を目的としたスミソニアンが設立され、市民の思想養育のための国立博物館が1858年に開館し、2年後に使節団がここを訪れたのである。案内したヘンリー長官は、知識の増大はオリジナルな研究によって達成されるもので真理の発見には分析的・理論的な物理学が重要と考え、スミソニアンを科学研究の機関にしようとした（高橋 2008 p.297）。一行に科学実験が披露されたのはこうした背景があった。

一方、教化と娯楽を両立させたマネージメントは難しく、創設期のアメリカのミュージアムは多くが経営破たんしている。ピールのミュージアムも同様で、1848年には所蔵品の多くが競売されるに至った。そのなかで大衆教化の側面をもちながらも、ボードビルや各種のショーを取り入れて興行的な見世物の色彩を強めたDime Museumが開設され、その先駆けでもあり成功をおさめたのが1842年開館のバーナムのアメリカンミュージアムであった（矢島 2015）。団員が訪れ

たのはその全盛期にあたる。

このように、ミュージアムを物品の収納羅列ではなく民衆の教育の場としながらも、他方では科学の研究機関を指向する考えもあり、さらに経営の安定化のために娯楽性を強化する方向性が入り混じる動向を、使節団は目の当たりにしたのである。初めて出合った異文化の思想的産物でもあり、訪れた3つをミュージアムという同じカテゴリーの存在と捉えた団員はいなかった。前掲の表のように、3施設とも訪れた団員の記述をみると、佐藤は類似の部分を取っているが、他は大きく異なる理解である。

パテント・オフィスとスミソニアンについては、同様もしくは類似と認識した者が少なくなかった。柳川・野々村・福嶋・加藤・佐藤・佐野らは、おもに珍奇の物品や動物魚介などの収納施設と両者を捉えた。これに対して、森田と村山はパテント・オフィスにおいて特許局の機能とかかわる器機械と模型の存在から、村垣と名村はスミソニアンに対して実験研究の機能の点から、それぞれ機能が異なる施設と捉えている。一方、バーナムのアメリカミュージアムについては、2つの施設と同じ概念で括られるものとはだれも考えなかった。多くは見世物という理解である。大勢の集客があったバーナムのミュージアムに対し、パテント・オフィスやスミソニアンも「男女見物堂内縦横群集ス」(パテント・オフィス：森田、記)などとたくさんの見物人がいたが、この2つを見世物や遊観の場とはだれも捉えていない。また、スミソニアンで実験を見た村垣は「さまざまの奇術」と記しながらも、見世物ではなく“究理”と認識している。ただし、佐藤のようにバーナムのミュージアムに教示的な部分を感じ取り、見世物とは異なるとした者もいた。

3つのミュージアムの実態については多くの団員が綴り、それぞれが機能を理解しようとしているが、役割を捉えようとした記述は

ほとんどない。わずかに佐野が、スミソニアンにおいて万国の諸物を民衆に示し識見を広める教化の役割があると捉え、パテント・オフィスにもこれに近いものを見出している。国民の教育というアメリカのミュージアム理念に考えを至らせた記述といえるが、バーナムのミュージアムに対して佐野は“見世物等”と見做し、別物との認識である。教科と娯楽の両立を試みるアメリカのミュージアムの実情はだれも把握できなかった。通詞を含めて英語の理解がほとんど困難な一行では（後藤 1990 p.2）、無理からぬことであった。

使節団は条約批准書交換の目的とともに見聞探索に努めたが、総じてミュージアムを重要視するには至っていない。玉虫はパテント・オフィスとスミソニアンをかなり詳述しているが、全体をまとめた「花旗国総説」にはアメリカの地理や歴史、諸制度、政治、風俗風習、産物、軍事などを記し、学校と教育にも着目しているが、パテント・オフィスやスミソニアンはまったく触れられていない。ミュージアムという概念と役割の理解には達しなかったからであろう。

一方でアメリカ政府は使節団がワシントンに到着すると、ホワイトハウスや議会に招いた後、三使らを最初に案内した一般施設がパテント・オフィスであった。条約批准書交換の前日のことである。さらに、一行の自由遊歩が許可された日に団員の多くが真っ先に見物したのはスミソニアンで、アメリカ側の働きかけがあった。つまり、アメリカ政府はミュージアムを近代の国家と世界観、さらにその文化を認知させるためのアイテムとしたのである。団員の記録をみるかぎり、その意図を読み取ることは彼らには難しかった。しかし、維新後の新政府で明治4（1871）年には実働する博物館創設の施策が、他の政策と比べても迅速に着手されたのは、近代国家におけるミュージアムの価値をみとめていたからにはほかならない。直接的には後続する文久

遣欧使節団の見聞や、慶応3（1867）年のパリ万国博覧会への参加の影響が大きいとみられるが、遣米使節団の記録や記憶も土台となったことは十分に考えられる。遣米使節の名村が「博物館」の文字を充てたパテント・オフィスは、教化の意図を見て取りながらも団員の多くは物品・宝物の収納場と捉え、究理や娯楽は異なる施設の機能との理解であった。これはやがて創設に至る日本の博物館の内容に重なる。

ところで「博物館」の語は、林則徐の『四洲志』もしくは魏源の『海国図志』が出自とされる（家永 2013 p.29）。日本での「博物館」の名称表現は名村の『亜行日記』より古いものはみあたらず、椎名の指摘のようにこれが最初とみられる（椎名 1986a）。『海国図志』から得た知識とみる見解もあるが（後藤 1990 p.6）、先述のように名村と玉虫が表記した“博物”は『博物新編』や『博物通書』から引いた語句と考える。文久の遣欧使節団になると「博物館」の語を使う者が増え、福沢諭吉もその一人である。『亜行日記』に做ったのかもしれない。しかし、『博物新編』の翻刻版などの普及により、自然誌や工業技術の収納陳列場を博物館と表記するのが時勢的な流れになった、とみるのが妥当である。ほどなく福沢が慶応2（1866）年に著した『西洋事情』初編において、「博物館」の用語でこれを紹介したのが定着の後押しになったのであろう。ちなみに、新政府下では廃仏毀釈の対策として、明治4（1871）年に古器旧物の保存施設が構想され、その名称は「集古館」であった。古器旧物は“博物”にあたらなからであり、“博物”が『博物新編』や『博物通書』に基づく認識であったことの表れといえる。

おわりに

遣米使節団の派遣中、江戸では桜田門外の変が起り、帰国の翌年にイギリス公使襲撃

事件、翌々年には坂下門外の変や将軍家茂攘夷決行の奉答など、攘夷の動きが激しくなる世情であった。そのため、団員の記録が積極的に公表されることはなく、彼らが得た政治・文化的な知識が幕府下の社会体制や制度に寄与することはなかったとの見方が強い。しかし、玉虫の『航米日録』のように写本が100点以上も残るものがあり（沼田 1974）、記録の一部は静かに流布し、明治国家の建設に影響を及ぼした可能性は否定できない。彼らが捉えたミュージアムに対する認識が、明治に創設される日本の博物館のあり方と重なることはすでに述べた通りである。

遣米使節の一行は、出会った3つのミュージアムの役割を十分に理解できなかった。けれども受けたインパクトは大きく、とくにパテント・オフィスとスミソニアンはアメリカ政府の目論見もあり、印象強く記述されている。やがて、文久の遣欧使節などの知見も加え、明治新政府は近代国家を実現するための象徴的な舞台装置として博物館を位置づけたからこそ、早期から開設を目指したのである。そのような博物館に込められた思考は、遣米使節団に向けたアメリカ政府の意図の反映でもあったと捉えることができる。

註

1. 大塚武松編 1928『遣外使節日記纂輯』第一 日本史籍協会、「米行日記」4月17日。
2. 沼田次郎・松沢弘陽校注 1974『西洋見聞集』岩波書店、巻八「華盛頓滞留中ノ事」。
3. 吉田常吉編 1959『航海日記』時事通信社
4. 註2文献 pp.7-259
5. 註1文献 pp.209-404
6. 日米修好通商百年記念行事運営会編 1960『万延元年遣米使節史料集成』第三巻 風間書房 pp.131-277
7. 註6文献 pp.279-400
8. 木村鉄太 1974『航米記』肥後国史料叢書第二巻 青潮社

9. 日米修好通商百年記念行事運営会編 1961『万延元年遣米使節史料集成』第一巻 風間書房 pp.1-270
10. 日米修好通商百年記念行事運営会編 1961『万延元年遣米使節史料集成』第二巻 風間書房 pp.1-43
11. 註10文献 pp.191-277
12. 名村だけは現地の日付を記しているが、他の団員は日付を変更していない。本稿では名村の日付を修正して他と合わせた。
13. 註10文献 pp.279-343
14. 註6文献 pp.1-130
15. 4月3日は条約批准書の交換日で、外国方御用達の加藤が同行しなかったとは考え難く、2日の誤記と推察される。
16. 註5文献 pp.405-510
17. 佐野鼎 1946『萬延元年訪米日記』金澤文化協會
18. スミソニアンの見物を4月2日と記しているが、他との兼ね合いからすると2日に訪ねたのはパテント・オフィスの可能性が大きい。佐野は日付のない記事が多く、稿本の際の誤認と考えられる。
19. 大塚武松編『遣外使節日記纂輯』第二 日本史籍協会 1929 pp.249-562

引用・参考文献

- 家永真幸 2013「中国の“博物館”受容に関する初歩的検討」『東京医科歯科大学教養部研究紀要』43 東京医科歯科大学 pp.27-41
- 川添裕 2000『江戸の見世物』岩波書店
- 後藤純郎 1990「万延元年遣米使節と博物館，図書館の見聞」『教育学雑誌』24 日本大学教育学会 pp.1-14
- 椎名仙卓 1986a「初めて“博物館”という言葉を用いた時」『博物館研究』21-6 日本博物館協会 pp.13-14
- 1986b「竹内使節団の見た“展覧場”と“博物館”」『博物館研究』21-7 日本博物館協会 pp.66-67

- 1988『日本博物館発達史』雄山閣 pp.109-132
- 2005『日本博物館成立史』雄山閣
- 高橋雄造 2008『博物館の歴史』法政大学出版局
- 財部香枝 1999「幕末における西洋自然史博物館の受容—万延元年（1860年）遣米使節団と Smithsonian・インスティテューション—」『博物館学雑誌』24・2 全日本博物館学会 pp.63-79
- 富島美子 1993「めだまし博物館 パーナムの一九世紀へ、いらっしやいませ」『現代思想』21—12 青土社 pp.24-44
- 沼田次郎 1974「玉虫左太夫と航米日録」『西洋見聞集』岩波書店 pp.551-564
- 八耳俊文 1992「漢訳西学書“博物通書”と‘電気’の定着」『青山学院女子短期大学紀要』46 pp.90-95
- 1996「幕末明治初期に渡来した自然科学的自然観—ホブソン『博物新編』を中心に—」『総合文化研究所年報』4 青山学院女子短期大学 pp.127-140
- マサオミヨシ（佳知晃子 監訳）1984『我ら見しままに 万延元年遣米使節の旅路』平凡社
- 松宮秀治 2003『ミュージアムの思想』白水社
- 矢島國雄 2015「Dime Museum—博物館という名の見世物」『Museum Study』26 明治大学学芸員養成課程 pp.31-40
- 若生謙二 1990「セントラルパーク動物園の歴史にみる動物園の変容とオルムステッドの公園観」『造園雑誌』54—5 日本造園学会 pp.90-95

The Museums Toured in United States of America by 1860's Japanese Delegation

KOMAMI Kazuo

The first Japanese governmental delegation for the ratification of the treaty of commerce between Japan and U.S.A was visiting America in 1860. They visited the Patent Office and the Smithsonian Institution in Washington D.C., and Barnum's American Museum in New York. We can know it by their diary and memorandum of 13 of them.

It would appear that US government would show them the Patent Office and the Smithsonian Institution to demonstrate that museums were civilized facilities to enable recognition of modern nations and world views, and also their cultures. US museums at that time were considered the place to educate people, and gave the direction to scientific research institutes. In addition, there was a movement toward adopting entertainingly value to stabilize the visitors. The delegation members were brought into contact with this complex situation, but they eluded to be wrapped in confusion and got proper understanding.

The museum creation policies came into effect in 1872, soon after the Meiji Restoration Japan. New government should found a value of museum in modern nation. The records and memories of 1860's Delegation seem to have served as one foundation of that policy.